

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

最終改訂年月: 30 June 2004

背景: 血栓溶解療法は急性虚血性脳卒中と何らかの類似点がある疾患の急性心筋梗塞に対して効果的である。メタアナリシスから急性虚血性脳卒中における実際の便益が示唆されている。

目的: 急性虚血性脳卒中に対する様々な血栓溶解薬と様々なレジメンについて評価すること。

検索戦略: Cochrane Stroke Group trials registerを検索した(最終検索2003年6月)、MEDLINE(1966年~2003年7月)、EMBASE(1980年~2003年7月)を検索した。日本の4種類のジャーナルをハンドサーチし、製薬会社と連絡をとるとともに関連する会議に出席した。

選択基準: 急性虚血性脳卒中の確定診断が下された患者を対象とした、ある血栓溶解薬の様々な投与量、各種薬剤、投与経路が異なる同一薬剤に関するランダム化試験と準ランダム化試験。

データ収集分析: 2名のレビューアが独立に試験の適格性と質を評価し、データを抽出した。

主な結果: 1641名の患者が含まれる10件の試験を登録し、8件は日本、1件は中国、1件は米国で実施されていた。割付けのコンシールメントについては十分に述べられていなかった。7件の試験(患者1072名)では異なる投与量が比較されていた(組織プラスミノゲン活性化因子またはウロキナーゼ)。3件の試験(患者688名)では異なる薬剤が比較されていた(組織プラスミノゲン活性化因子とウロキナーゼの比較;組織培養ウロキナーゼと従来のウロキナーゼの比較)。1件の試験では投与経路が比較されていた(組織プラスミノゲン活性化因子の静脈内投与ならびに動脈内投与と組織プラスミノゲン活性化因子の動脈内投与単独の比較、患者35名)。異なる薬剤と異なる投与量について比較された試験もあったため、2つの分析で対象とした患者もいることとなる。高用量血栓溶解療法では、低用量の同一薬剤と比較して致死的な頭蓋内出血に3倍の増加と関連していた(オッズ比(OR) 3.25、95%信頼区間(CI) 1.32~7.97)(7件の試験において、高用量投与患者539名では事象16件と低用量投与患者533名では事象4件であったことから)。低用量と高用量で、早期死亡(OR 1.01、95%CI 0.58~1.74)と晩期死亡(OR 0.94、95%CI 0.58~1.53)に統計的有意差は認められなかった。機能的アウトカムに対する用量の効果を評価できるほどのデータは得られなかった。試験にて用いられた血栓溶解薬間での統計的有意差は認められなかった。異なる投与経路を比較するパイロット試験のデータは決定的なものではなかった。

レビューア見解: 上記のようにわずかなデータから、高用量血栓溶解薬では出血率が高くなることが示唆されている。しかし、急性虚血性脳卒中では、低用量血栓溶解薬の方が高用量血栓溶解薬よりも効果が高いのか否か、いずれかの薬剤が他の薬剤よりも優れているのか否か、いずれの投与経路が最善であるのかに関し、結論が下されるほどのエビデンスは得られていない。

Citation: Mielke O, Wardlaw J, Liu M. Thrombolysis (different doses, routes of administration and agents) for acute ischaemic stroke. The Cochrane Database of Systematic Reviews 2004, Issue 4. Art. No.: CD000514. DOI: 10.1002/14651858.CD000514.pub2.

Clib issue No.: 2005 issue 4

CRG名: Stroke

* **ご注意:** この日本語訳は、試験的翻訳(Draft翻訳)版として公開するものであり、翻訳の正確さや質が保証されたものではありません。訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡下さい。また、この試験的翻訳版はコクラン・ライブラリ2005年issue 4に掲載されたレビュー・アブストラクトの翻訳です。コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されていますので、ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認下さい。